

週報

こひつじ

第39巻 30号
 大津キリスト教会
 菊池郡大津町室 119
 TEL 096-293-4470
 FAX 096-293-4961
 牧師 米村 英二

行なおうとする者は、わかる

その三 実生活を通して学ぶ

聖書が実践の書であるなら、そく日々の生活の中で自らを教育なればやはり生活の中で読まれるべきだったのでないだろうか。きだろ。

『ものの方について』の著者 教室ではなく、その多くは野外に笠信太郎は、国民性の違いについて おいて、日常の出来事を通して行て、こんな言葉を紹介している。 なわれた。弟子たちは日々イエス「イギリス人は歩きながら考える。を見ながら、信仰を学んだのであフランス人は考えた後で走り出す。る。

そしてスペイン人は、走ってしま 会社をやめ、伝道を志したとき、った後で考える」 私は神学校への進学を願ったが、

歩きながら考えるというイギリス その道は開かれず、オランダ人のス人はきわめて实际的だ。地に足 宣教師のもとで訓練を受けることがついている。実行と思想が離れ になった。

ばなれではなく、並行している。 五年近くそこにいたが、宣教師いうことだろうと、笠は言う。 が教室を設けて聖書の講義をして

労働者だったイエスも、おそらくれたことはなかった。

毎日の訓練といえば、勉強より皿洗いやペンキ塗り、草取り、コンクリートや大工工事などの作業が多かった。それならそこで私は何を学んだのか。

「なにごとが起ころうと、すべては神のみ手から授けられるものと信じ、もはやいろいろと思わずらうことなく、ただ開いた門を通って行く」

それが幸福への道だと、ヒルテイは言っているが、主が私に教えようとしてくださったのは、まさにそのことだったのでないかと、今は振り返る。

それは知識の習得よりはるかに難しく、したがって挫折の連続だった。しかし考えて見ると、その挫折が私を神に向かわせてくれたのである。

キリスト教の教理も、教室においてではなく私は実生活の中で学んできたように思う。

クリスチャンになって私は、神がひとり、天地万物の創造者で、かつまた私の父であるということを知った。

言うまでもなく、それはキリスト教の重要な教理の一つである。未来を恐れ、死を恐れて生きていた私にとって、自分の人生を支配するのが意地悪な運命や宿命ではなく、私を造り、今も愛してくださっている神であり、その方が、私の父であるというその思想は、私の体験となって、私の心を深く慰めてくれた。

キリスト教の根本的教えである贖罪も知識にとどまっていた間、私の心に感動はなかった。それが私の魂を深く慰める思想となるには、私自身が、さらに人生の経験を積んで、自分の心に潜む罪がいかに恐るべきものであるかが示されるまで、待たなければならなかったのである。

復活の教えも同じく知識のままの期間が長かった。ところ牧師になった。すると、多くの人の死に直面する。若い人の死もある。事故で突然亡くなった人もいる。いったいこれらの人の死後はどうなるのか。残された家族は、これをどう受けとめたらよいのか。

もし死後の世界がなく、天国が（一列王記一九の九）の言葉からなく、そして復活もなければ、人でした。あのような復活もなければ、人ではた。あの強かった預言者エリヤが、こうして復活は、私にとつてな王の妻イゼベルの怒りを恐れ、逃げてはならない教えとなったので、疲れ、途方にくれ、ほら穴で一夜を明かしたとき、神が彼に言

このように私は、キリスト教のわれた言葉です。自分も振り返ると、落胆して自分と与えられた人生の課題と真こへもゆこうとしなかったとき、剣に取り組むことよつて現実のものにしていったように思う。つに叱責されたことがあると、岩崎まり私はそれらの真理を歩きながら学んできたのである。

（終）
○自己紹介と証は南阿蘇村在住の松田幸恵さんでした。神奈川県の川崎から九州を旅し、たまたま高森駅で雨のやむのを待っていたとき、スプア宣教師に傘を貸し与えられ、そのまま教会に泊まったことが、クリスチャンになるきっかけだったと話してくだ

さいました。
○説教は米村牧師。

○第一礼拝は午前一〇時から、
第二礼拝は午前一一時から。
○教会学校は午前一〇時からこ

ひつじ館で。

○説教は米村牧師。

○司会は合志文利さん、奏楽は吉岡裕美さん。

○説教は岩崎宏志さんで「エリ子よ。ここで何をしているのか」

CS キャンプ

七月二十九日（土）のCS キャンプは、インフルエンザの流行などでもあつて大事をとり、キャンプ場ではなく、教会で行ないました。

先週の礼拝で話して下さつた松田幸恵さんも、そうですが、いろんな方が、スプア宣教師と出会うつて、人生を変えられたのですね。ときどき『スプア宣教師記念会便り』が送られてきます。こんな証を読みました。

今も、大分県中津市で牧師をしておられる小松清志さんは、ぼくより六歳上で、やはり熊本電波高校の出身です。在学中にスプア宣教師と出会い、信仰に導かれまし

た。卒業後、高知県の中村気象台に就職したのですが、その気象台は高知県の西端にありました。あるとき、東京から熊本に帰る途中に小松さんを訪ねたいという手紙がスプア宣教師から届きまし

た。こんな遠いところまでほんとうに来られるのか、道をまちがえれるのではないかと不安でしたが、その日を小松さんは待ちました。でもそれは、うんざりするほどの遠い道のりで、ようやく着いたとき、彼女が最初に言ったことは、「中村は地の果てですね」だつ

たと言います。このように一人の魂を愛して、会いに来てくれたスプア宣教師に小松さんは感動します。やがて小松さんは、自分もまた彼女のような人生を送りたいと思ひ、気象台をやめ、神学校に進んだのだと書いておられました。

私はそれを読んで、こんな手紙を小松さんに書きました。

「スプア先生が小松さんを訪ねて、まさに地の果てもいふべき高知県の気象台までゆかれた話は感動的です。スプア先生のそういうところ、当時の若者たちの心をとらえたのでしようね。ぼくも、そんなスプア先生に心を奪われた者のひとりです」